

# 第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会

平成30年7月19日（木）  
午前10時から12時まで  
特別第一会議室（別館9階）

## 次 第

### 1 開会

#### （1）知事挨拶

### 2 議事

#### （1）報告

第1回静岡県総合教育会議開催結果

#### （2）意見交換

「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ、文化芸術）

#### （3）その他

### 3 閉会

#### <配布資料>

資料1 第1回静岡県総合教育会議開催結果

資料2 「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ、文化芸術）に関する論点

別冊資料 ・ 第2回実践委員会参考資料

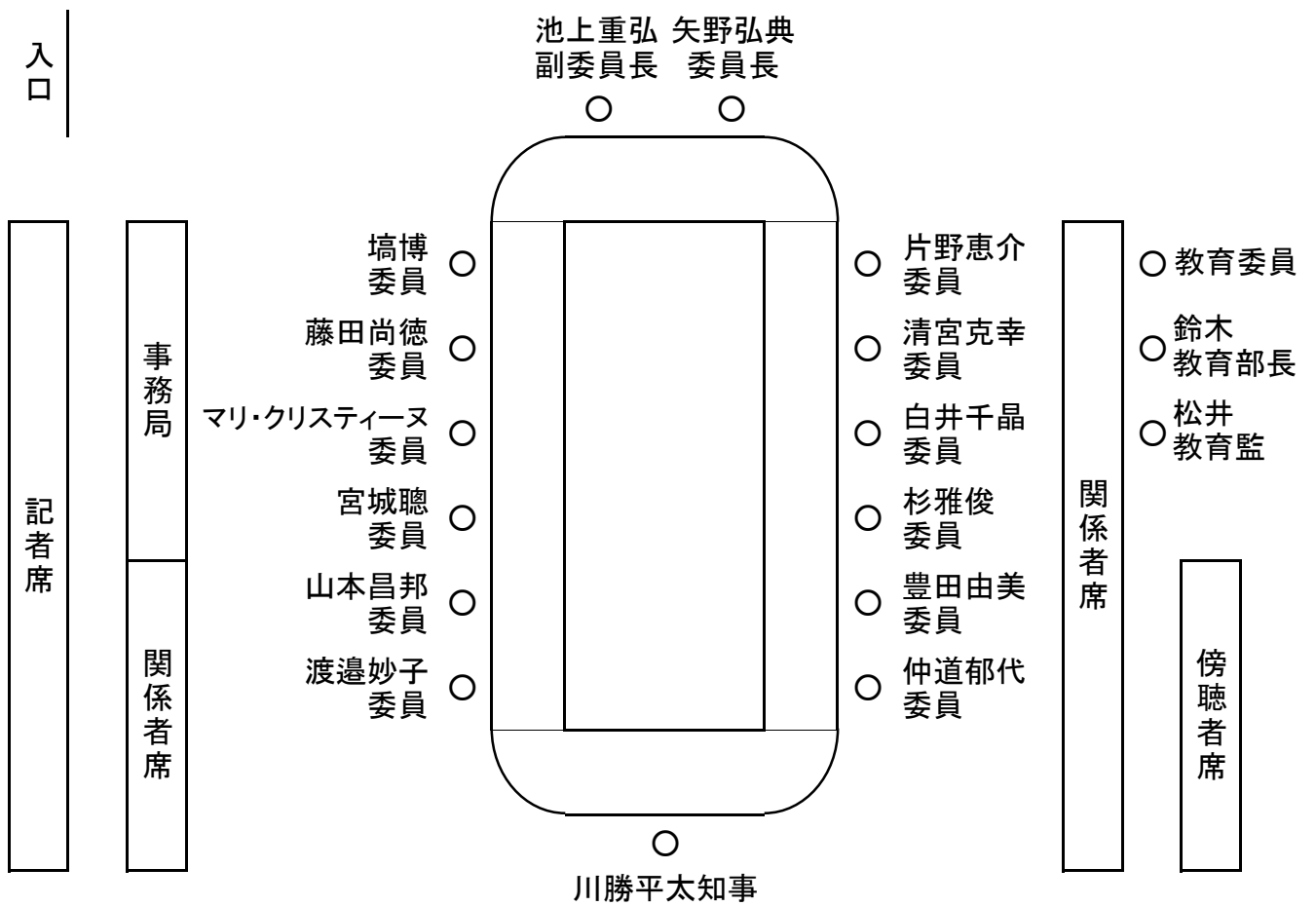
・ 技芸を磨く実学の星 スポーツ編

・ 技芸を磨く実学の星 産業・芸術編

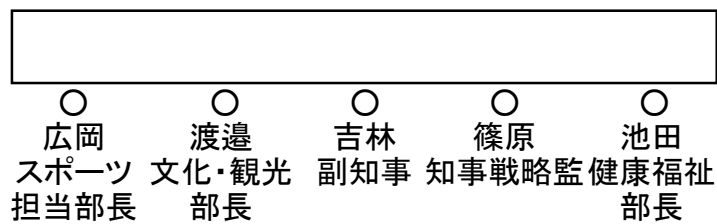
# 第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 座席表

日時 平成30年7月19日(木)午前10時～

場所 別館9階特別第一会議室



入口



地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会委員一覧

(委員長、以下 50 音順、敬称略)

氏 名	役 職
やの ひろのり 矢野 弘典 (委員長)	(一社) ふじのくにづくり支援センター理事長
いけがみ しげひろ 池上 重弘	静岡文化芸術大学副学長
かたの けいすけ 片野 恵介	青年農業士
かとう あきこ 加藤 暁子	日本の次世代リーダー養成塾専務理事、事務局長
きよみや かつゆき 清宮 克幸	ラグビートップリーグヤマハ発動機ジュビロ監督
しらい ちあき 白井 千晶	静岡大学人文社会科学部教授
すぎ まさとし 杉 雅俊	静岡産業大学総合研究所参与
たけはら いずみ 竹原 和泉	横浜市立東山田中学校ブロック学校運営協議会会長
とよだ ゆみ 豊田 由美	ちやの <sup>き</sup> 生代表
なかみち いくよ 仲道 郁代	ピアニスト、桐朋学園大学音楽学部教授
ばん ひろし 埴 博	藤枝明誠中学校・高等学校校長
ふじた ひさのり 藤田 尚徳	株式会社なすび専務取締役
マリ クリスティーヌ	異文化コミュニケーター
みやぎ さとし 宮城 聡	(公財) 静岡県舞台芸術センター芸術総監督
やぶた てるあき 藪田 晃彰	日光水産株式会社代表取締役社長
やまもと まさくに 山本 昌邦	(一財) 静岡県サッカー協会副会長
わたなべ さやか 渡部 清花	東京大学大学院総合文化研究科修士課程
わたなべ たえこ 渡邊 妙子	(公財) 佐野美術館館長

## 平成30年度 第1回静岡県総合教育会議 開催結果

- 1 開催日時 平成30年6月7日(木) 午前10時～正午  
 2 開催場所 静岡県庁別館8階第1会議室A、B、C、D  
 3 出席者

静岡県知事	川勝 平太
教育長	木苗 直秀
教育委員	斉藤 行雄
	渡邊 靖乃
	藤井 明
	加藤 百合子
	伊東 幸宏
地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会	
副委員長	池上 重弘

- 4 議事 「知性を高める学習」の充実(確かな学力の向上)  
 5 出席者発言要旨(抜粋)

出席者から以下のような提案が出された。

<論点1：大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組>

- ・基礎学力の習得には、人工知能(AI)を有効利用し、知性を高める学習に時間を割き、教師の時間的・精神的余裕を生み出すことに繋げるべきである。
- ・文武芸三道の鼎立の視点から、コアスクールの取組はよい。成果をすぐに求めるのではなく、適切な中間評価や修正を行い、新しい魅力ある学校をつくる取組を行っていくことが大切である。
- ・教師が子供と対峙して教えていく学力は、思考力や判断力、主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度である。知識・技能は自宅で学習し、学校ではディスカッションをするなど、学校でできること、やるべきことを厳選することが大事である。
- ・国が主導する義務教育の価値が東京では低下している。静岡県は東京に比べると義務教育がまだ機能しており、今こそ県として義務教育のあり方を真剣に考えるべきである。
- ・学校現場は知性を高める学習の場以外の要素が余りにも多い。教師は、子供たちが塾に行かなくても十分な学力を身に付けさせる指導能力を持っている。教師が知性を高めることに集中できる環境を整えることをオール静岡で考えるべきである。
- ・教師はティーチから子供たちの意欲・関心を高めていくファシリテーター、コーチングに仕事がシフトしてくることを考え、教師の負担感を減らし、教師がやるべき仕事を再度見直していく必要がある。

- ・歴史教育を軽視してはいけない。新たな学習指導要領では歴史総合という新しい科目になり、グローバルの視点から大切な科目になるが、教師が教えられるのか不安に思う。
- ・教員の資格をもっていない塾や予備校の講師の方が教え方は上手い。資格を持っている教員のレベルが低いので塾に行かざるを得ない現状ではないか。

#### <論点2：学力向上に向けたICTの効果的な活用>

- ・子供たちがICTを活用して学ぶことよりも、教師の事務的負担を軽減するために学校事務で活用する方が優先である。
- ・ICTを全ての授業で使用する必要はない。特定の単元で実際に体験できないことをバーチャルで可視化することとして使用することは有効である。
- ・スポーツの人材バンクのように、ICT分野でも人材バンクをつくり、シニア人材や学生など専門性のある適切な人材を登録し、地域やその方の都合に応じて、なるべく多くの方々に支援してもらおう。
- ・教育分野におけるICT活用関連の学会がある。学会で活躍している県内の研究者が多いので、県内で活躍できる場を提供することも大切である。
- ・教員採用試験でICTの活用能力を問う試験科目を取り入れるべきである。

#### <その他意見>

- ・飛び級制度を導入している大学もあるが、特定の分野では大学での勉学に十分な学力を持つ学生を、その他の分野も含めて大学レベルに引き上げていく力が今の大学にはない、あるいは、優秀な高校2年生を地方の一大学に進学を促す学校や保護者が果たしているのか、という意見がある。
- ・静岡県として、ふじのくに地域・大学コンソーシアムをもっと活用し、海外大学への進学や、生徒の希望を考慮した飛び級制度を検討した方がよい。

## 6 知事総括

- ・具現化できるものは実行し、調整をするものもあるが、今日の議論が無駄にならないようにしていきたい。

**「知性を高める学習」の充実（確かな学力の向上）に関する論点**

子供たちの資質・能力を伸長するためには、子供たちに基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等を身に付けさせるとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことが必要である。

特に、子供たちが主体的に学習に取り組み、学習を習慣付けるためには、大学や地元自治体等と連携した授業の実施や、タブレット端末や提示用デジタル機器等のICTの活用等を通じて、子供たちの興味や関心を引き出す取組が必要である。

※確かな学力…基礎的・基本的な知識や技能に加えて、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含めた幅広い学力

**論点1：大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組**

(高校段階)

- ・高大接続改革等に対応し、子供たちの学習意欲を高め、社会で役立つ確かな学力を育成するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

(小学校・中学校段階)

- ・子供たちが自ら学びたいという意欲を持ち、理解の質の向上や知識・学習習慣の更なる定着を図るために、具体的にどのような取組が考えられるか。

**論点2：学力向上に向けたICTの効果的な活用**

子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、授業等においてICTを活用することが効果的であるが、具体的にどのような取組が考えられるか。

## 実践委員会の意見の総括

### <論点 1：大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組>

- ・学習とは、学校の宿題や予習に限られるものではなく、将来の目標のために努力することや、必要な資格を取得するための勉強も含まれる。子供が目標を自発的に見つけて、周りがサポートしていく体制づくりが必要である。
- ・大学や地元自治体と連携して、中学生や高校生が比較的イメージしやすいテーマ、あるいは当事者性を持って考えられるテーマで継続的なワークショップを行う取組は有意義である。また、高校生に一年間テーマを持たせて研究できるようにするなど、教員が時間に縛られず、余裕と自信を持って授業ができるようになると良い。
- ・学校教育が不足しているから子供たちは塾に行く。学校教育を充実させ宿題を無くせるよう、子供たちが学校にいる時間をいかに有意義に使うかを議論すべきである。一方、教員は塾に通う子供の学力状況を把握し、同じアプローチを避けるなど授業改善に繋げることが必要である。
- ・子供たちのグローバル化の推進には、自国の歴史や自分たちの住む地域を学び、自己を見直すきっかけを与えることが大切である。
- ・これまで強みとして日本の教育が蓄積してきたもの、日本語で鍛えた思考力というものに自信を持つべきである。一方で、なぜ今の教育がだめだと言われるようになったのか、日本の教育のどこが良くないのか、問題の本質を分析して精査する必要がある。

### <論点 2：学力向上に向けた I C T の効果的な活用>

- ・スカイプなど、I C T を活用してクラス単位で海外の高校生と交流させることで、国際化の一翼を担うことができる。
- ・教師の I C T 活用能力を育成するためには、学校内に必要な知識や技術を習得できる支援体制づくりや、I C T を活用できる民間人及び大学生との連携、I C T 支援員の養成が必要である。

## 「知性を高める学習」の充実に関する実践委員会の意見

### 論点1：大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組

#### 学力・学習状況の実態について

- 高校生の勉強に対する意欲など、現実をしっかりと分析しなければ学力向上の答えが出てこない。(矢野委員長)
  
- データの取り方と目指すところの齟齬を感じる。思考力・判断力・表現力や主体的に協働して学ぶことが大切としておきながら、小学校、中学校の学力の目安がテストの点数で表すと、そこでは測りきれない部分をどのように捉えて施策に盛り込んでいくのか。本当の学力をどのように培っていくのか、データの取り方・考え方を議論すべき。(仲道委員)
  
- 狭義の学習時間のデータとともに、幅広く「知性を磨くことにあなたは何を努力していますか」と問うと数字は変わってくる。ゲームもコンピューター能力を高めるという視点では学習に当てはまるかもしれない。(杉委員)
  
- “勉強”というのは、学校の宿題や予習に限られるものではなく、例えば将来スポーツ選手を目指す人なら部活で努力をすることや、将来必要な資格を取得するための勉強も家庭学習になるのではないか。子供が自発的に見つけて、それを周りがサポートしていく体制が必要である。(豊田委員)
  
- 県内の学力を調べるにあたり、県全体でまとめるのではなく、例えば、東・中・西の3ブロックに分ける、あるいは地域を細かく分けるなど、地域ごとに結果をまとめ、それを改善に繋げられないか。(片野委員)

#### 授業改善について

##### 〔高校段階〕

- 大学や地元自治体と連携した取組をすることで高校の学びを豊かにすることができる。例えば、行政が多文化共生や男女共同参画など、中学生・高校生が比較的イメージしやすい分野のプランをつくる際に、ワークショップを継続的に行うという取組は有意義だった。また、NIE(ニュース・イン・エデュケーション)を活用して、中学生や高校生が当事者性を持って考えられるテーマに取り組んでみるというのも一つの方法である。(池上副委員長)



○教員が時間に縛られず、余裕と自信を持って授業ができるようになると良い。例えば、高校生でも一年間テーマを決めて研究させるような取組ができれば良い。(加藤委員)

○大学入試で思考力を問う問題を出さなければ思考力を養うことはできない。ただ、一般教養の部分での暗記させることは大切である。問題は暗記と思考力のバランスである。(加藤委員)

#### [小学校・中学校段階]

○芸術教育は、アクティブラーニングに対して非常に有効な手段である。音楽や演劇などをどのように学校教育に入れていくのか、特に小学校段階で議論すると良い。(仲道委員)

#### [共通]

○時間をどう使うか。企業でいう残業が子供たちの宿題に当たる。学校教育で足りないものを家庭で補うということを、今はどこの県でもやっている。それを静岡県はなくす宣言をする準備をしてはどうか。子供たちが学校にいる時間をいかに使うかを徹底的に議論するべき。(清宮委員)

○学校教育が不足しているから子供たちは塾に行く。学校教育が充実していたら塾に行く必要がない。学校教育のあり方を反省するということは必要である。(矢野委員長)

○周囲を見ていると、小・中・高と学年が上がるにつれて、学習塾や予備校に行く割合がクラスの中で増えていった。塾が予習や復習をやるから授業へのモチベーションは下がるのではないか。教員側に生徒個々の学習背景が見えてくると、塾で学習した内容や教え方を避け、学んだことを活用したグループワークを行うなど、授業内容を工夫することに繋がるのではないか。(渡部委員)

○訓練によって人間の思考というのは鍛えられる。やはり論理的思考力を習得するためには文章を書くことが重要である。(埴委員)

#### グローバル教育について

○外国人を接客する中で感じたこととして、文法を習うとかではなくてコミュニケーションがとれるグローバル人材の育成を幼少期から実施しても良いのではないか。(豊田委員)

○世界の大学ランキングでは日本の大学ランクは低い。自分が関わっている高校生の例では、東大や京大に進学せず、海外の大学に進学するケースが増えている。日本の高校生の留学者の人数、海外からの留学生の受け入れ人数、海外大学への進学者数などの調査もあると良い。(加藤委員)

- 留学生が日本の文化や歴史を勉強して、それに周りの日本人生徒が触発されて自分たちの住む地域を勉強していく。グローバル化が自己を見直すきっかけになる。(埴委員)
- 日本の子供たちが日本の歴史について知らないというのは、本当に良くないことである。県全体で歴史教育をしっかりと行うことが大切である。(加藤委員)
- 脳内で一つの言語でしか思考力は鍛えられないとした場合、その思考力が養われていないのに、ツールとしての語学を獲得して何になるということがある。(宮城委員)

### 日本の教育に関する意見

- 日本の近代化が成し遂げられたのは、別に外国語が得意だったからではない。今までの日本の教育が蓄積してきたもの、日本語で鍛えた思考力というものにも自信を持つべきである。(宮城委員)
- 今、弱点だと言われている思考力や語学力の不足への指摘は、別に昨日、今日始まったわけではない。それをむしろ強みとしてやってきた時代があった。なぜ、今そんなにだめだ、だめだと言われるようになっているのか。日本の教育のどこが良くないのか、問題の本質を分析して精査する必要がある。(宮城委員)
- 日本で教育を受けさせたいとアジア各国の方々から言われている。それは挨拶や礼儀など道徳心を学ぶことができるからである。また、日本人の一番いいところは、聞く耳を持っている、あるいは聞く能力があるということ。これは100年なり200年の教育の賜物である。(加藤委員)

### その他の意見等

- 「知性を高める」ことは「人間力を高める」「教養を豊かにする」と同じことと捉えた場合、教養とは何であるか。教養を培う家庭環境や熱意が薄くなっている今、公共の教育機関は教養をどう考えるのかということ是非常に大切である。(仲道委員)
- 最近の小・中学生の保護者の話を聞いていると、自分の子供を自分の所有物のように捉えている親が多い。学校や先生にいろいろな話を持っていくことが非常に多い。子供たちの知性を高める前に、保護者や家庭の関わり方や考え方もテーマとして取り上げて、双方を高めていかないといけないのではないか。(豊田委員)

## 論点 2 : 学力向上に向けた ICT の効果的な活用

### ICT を活用した取組について

- スカイプでアジアの高校と繋がり、共通言語を英語にして、一つのテーマのもと皆でディスカッションを行ってはどうか。日本の高校生のディスカッション能力は他のアジアの国と比べ低いので、ICT を活用してクラス単位で海外の高校生と交流させることで国際化の一翼を担うことができる。(加藤委員)

### 教師の ICT 活用能力の育成について

- ICT 活用事例の中で、世界と繋がっている様子が無いのは、教員に世界の仲間と繋がる発想が無いからである。こうした実態を踏まえ、ICT をどう使うかといった視点で教員を育成しなければならない。(池上副委員長)
- 転任してきた先生が ICT 活用を不得意とする場合、学校内の推進委員会が責任を持って先生を教育する体制を持つ学校がある。教材づくりやプレゼンテーション時に、学校が必要な能力や知識を指導し、経験を積ませることは大切であり、県を挙げて実施すると良い。(矢野委員長)
- ICT 支援員を活用することによって、教員が ICT を使って思うことを実現させることができる。静岡県は支援員の養成と、支援員のリース代を支援できると良い。授業内容を ICT にどう繋げるか分からない時に、支援員が入ることで良いものができる。この ICT 支援員資格というところに目を向けて欲しい。(杉委員)
- 富士山のある静岡県は世界の人たちと繋がりやすいメリットがある。教員が世界と繋がるためにどう活用したら良いか、静岡県出身の起業家や大学生等、若い世代の人たちを活用すると良い。(加藤委員)

### ICT 活用に対するその他の意見

- スマホを使ってコミュニケーションをとっているが、相手と直接話をしている訳ではない。近ごろの人たちは人間関係づくりが下手だというようなことが言われている。それが実はダメージが大きい。どうやって調和をとっていくかが大きな課題である。(矢野委員長)
- 若者はコミュニケーションが苦手ではなく、現代はコミュニケーションのやり方、それによるスピード感が変わってきている。世代間でそれぞれコミュニケーションがとれていないと思いがちだが、お互いリスpekトしながら補完し合うと良い。(渡部委員)

## 「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ・文化芸術）に関する論点

---

静岡県の未来を担う「有徳の人」の育成を進めるに当たっては、「知性を高める学習」（英数国理社等）だけでなく、小さな頃から「技芸を磨く実学」（農林水産業、工業、商業、芸術、スポーツ等）に触れる機会を与え、子供たちの興味や関心を引き出し、一人一人の能力や適性、意欲に応じた多様で柔軟な教育をより一層展開する必要がある。

特に、ラグビーワールドカップ 2019、東京 2020 オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラムの開催を目前に控え、県民のスポーツや文化芸術に対する関心が高まる中、子供たちの興味を深め、能力を更に伸ばす仕組みづくりが重要である。

### 論点 1：子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進

国際イベントの開催を一過性のものとすることなく、これを契機として、子供たちのスポーツ・文化芸術活動を促進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

### 論点 2：異文化交流の促進

国際イベントは、単にそのイベントを観る、あるいは参加するだけではなく、世界の文化に触れる絶好の機会である。この機会に、子供たちの異文化交流を促進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。